THE DAILY NEWS
KOBE 2024 PARA ATHLETICS WORLD CHAMPIONSHIPS
Sat 25 May
DAY 9
Japanese

Yesterday's Highlight

世界の頂点を狙う、白熱のレース！

競技8日目は晴天ながら風を感じる一日となった。トップ選手が目まぐるしく変わる試合展開のレースが多く、スタンドを埋めた観客たちの目を釘づけにした。

■T20男子1500m

知的障がいのクラス、T20男子1500mが行われ、9名の選手が出場。アメリカのマイケル・ブラニガンが3分51秒71の大会新記録で優勝した。ブラニガンは2016年のリオ大会、2021年の東京大会でパラリンピック2連覇を達成し、2017年には3分45秒50の世界記録を樹立している、このクラスのトップ選手である。昨年のパリ大会では銀メダルに甘んじたが、今大会で再びチャンピオンに返り咲いた。

スタート直後に飛び出したのは、NPA（中立のパラリンピック選手）のPavel SARKEEVだ。ブラニガンは終始３番手をキープしながら、前をいくSARKEEVについていく。途中、２番手の選手が入れ替わっても、SARKEEVとブラニガンのポジションはほとんど変わらない。レースが動いたのは、ラスト1周だった。ブラニガンがスパートをかけるとSARKEEVを捉え、一気に引き離して一人トップに躍り出る。他を寄せ付けず、フィニッシュラインを切ったのだった。

優勝したブラニガンは「とてもグレイト、とてもハッピー！」と喜びを口にした。「今日は自信を持って走れました。自分を誇りに思う。次の目標はパリパラリンピック。3分40秒台の世界新記録で、リオ、東京、パリの3連覇を目指します」と語った。

2位争いは、熾烈な戦いに。ラスト１周の場面で、日本の十川裕次が２番手に順位を上げた。

十川は、スタートから５番手、６番手の位置でずっと走っていた。「スタートからほかの選手が前に出たので、無理して前に出ずに力をためていこうと思っていました。選手たちのシーズンベストのタイムからすると、あまりペースは上がっていないので、ラストで切り替えようと思っていました」。

自分のレースプラン通りに淡々と前を走る選手たちとの差を詰めていく。勝負をかけたのは、残り１周、バックストレートの直線に入ってからだ。一気に前に出ると、遠くを走るブラニガンの背中を追いかけていった。しかし、ゴール直前、後ろから追い上げてきたポルトガルのSandro BAEESAに追いつかれ、3位でフィニッシュした。「ちょっと、油断していました。もったいなかった」と、悔やんだ。

世界選手権で初めてのメダルを手にした十川は、「今大会で2位以内に入らないと、パリパラリンピックの出場枠を取れないので、そこは本当に悔しいです。それでも、しっかりと世界と戦えたことはパラリンピックに向けて、いい収穫でした」と、悔しさと手応えを語った。

日本は、ほかに赤井大樹、岩田悠希が出場した。赤井は400m付近、岩田は1000m付近で、先行する選手と接触し転倒。起き上がってレースを続けたが、それぞれ6位、9位の結果に終わった。

■F46男子やり投げ

上肢障がいクラスのF46男子やり投げには12選手が出場した。パラリンピックのメダリストや前回パリ大会の上位入賞者たちがずらりと顔を揃え、日本からも東京パラリンピック代表の3名がフルエントリー。時折、強く吹く風に翻弄されながらも、実力者たちが迫力ある投げ合いを演じ、誰が勝つのか最後まで分からない見応えある展開になった。優勝したのは6投目で大会新記録となる65m16を投げたキューバのギジェルモ・バロナゴンサレス。前回6位から大躍進で世界選手権初優勝となった。

1投目でトップに立ったのは62m04を投げた、ディネシュプリヤンタヘラタ・ヘラトムディヤンセラゲ（スリランカ）だった。東京パラリンピック金メダリストで、前回パリ大会は3位に入っている実力者だ。ヘラトムディヤンセラゲは2投目に、64m59を投げ、大きくリードを広げていた。

優勝したバロナゴンサレスは1投目に61m63で全体に2位につけ、その後も安定した投てきを見せ、5投目で63m32まで記録を伸ばした。最終6投目で 65m16のビッグスローを放ち、トップに立つ。最終投てき者はそれまで1位を守っていたヘラトムディヤンセラゲだったが、プレッシャーもあったのか、58m65に終わり、再逆転はできなかった。

バロナゴンサレスはメダル獲得とパリパラリンピックの出場枠獲得を目指していたといい、「2回目の世界選手権で結果が出て嬉しい。パリにつながる大きな弾みとなった」と喜びを語った。インドなどアジア勢が強い種目だが、「ライバルのことはあまり意識せずに投げたことが勝利につながったと思う。6投目は神の力と家族のことを想って投げた結果です」と振り返った。

強豪インドの3選手は明暗が分かれた。前回パリ大会2位のリンク―（インド）と同1位のアジートシンは4投目に62m77、62m11をマークして上位に浮上、そのまま最終3位、4位となった。一方、世界記録（68m60）をもつスンダルシン・グルジャルは、3位回目以降はすべて失敗投てきとなり、2投目の59m03で8位に終わった。

日本勢は3投目を終えた時点の記録により、山崎晃裕が57m48で7位、高橋峻也が56m23で8位に入って4投目以降に進んだ。最終6投目、先に投げた高橋が59m81まで伸ばしたが、山崎が61m02と大きな一投を放ち、逆転した。

全体6位で競技を終えた山崎は、「コンディションが良く、自己ベスト（61m24）以上、65mという目標を立てていたので、ちょっと悔しい。技術面の修正ができなかった」と振り返った。強い追い風への対応が難しく、「次回に生かしていきたい」と前を向いた。

同7位に入った高橋は、「風も強く、難しい試合展開だったが、6投目は観客の手拍子の後押しもあって、助走を全力で走ることができ、記録を伸ばせた」と振り返った。小柄な高橋にとって、スピードに乗った助走の力をやりに乗せていく投てきが持ち味だ。「今後も助走スピードの強化に取り組みたい」と、さらなる進化を誓っていた。

なお、白砂匠庸は3本目終了時点で54m22の9位、惜しくも後半に進めなかった。

[5月25日午後追記】
5月25日午前にクラス分けの変更が発表され、2位に入ったスリランカのディネシュプリヤンタヘラタ・ヘラトムディヤンセラゲが失格となり、3位以降の各選手の順位が１つずつ繰り上がった。

■ユニバーサル4 x 100m リレー

男女2名ずつによる4 x 100mのリレーで、第１走者は視覚障がい、第2走者は切断・機能障がい、第3走者は脳原性まひ、そしてアンカーとなる第4走者は車いすの選手が担う。パラ陸上競技特有の種目で、その名の通りユニバーサルなリレーである。選手はバトンの受け渡しではなく、タッチでつないでいく。決められたゾーン内でいかに効率よく、加速しながらタッチワークしていくかが、最大の見どころだ。

今大会には、日本、中国、コロンビア、インドネシア、イギリス、アメリカの６カ国が出場。２組に分かれて予選が行われ、各組1位と、タイムによる上位２チームがイブニングセッションに行われる決勝に進出した。予選を通過し決勝に駒を進めたのは、１組1位の中国、２組1位のインドネシア、そして日本とイギリスの４カ国だ。

日本は、昨年のパリ大会でこの種目金メダルを獲得している。今大会には、この金メダルを獲得したメンバー4名による構成で出場した。第１走者はT12女子の澤田優蘭、第２走者はT47女子の辻沙絵、第3走者はT36男子の松本武尊、そしてアンカーはT54男子の生馬知季である。予選では、中国に1位を譲ったが、47秒60の日本新記録をマークして2位となった。予選1位の中国は、45秒66の大会新記録を打ち立てた。予選２組は1位、2位ともに47秒台というデッドヒート。予選からそれぞれハイレベルの戦いとなった。

決勝は、この日の最後に行われた。障がいによる走順は決まっているが、男女の組み合わせなどメンバーをどう組み合わせるかはそれぞれのチームで異なる。女子選手と男子選手が並んで走るのは、このユニバーサルリレーだけである。

スタート直後から飛び出したのは、中国だ。１走Guohua ZHouは女子、２走Hao WANGは男子、３走XiaoyanWENは再び女子、アンカーの車いすYang Huは男子という構成で、この4名は昨年のパリ大会と同様である。チームを組んでからレースごとに記録を更新し成長を続けてきたという。圧倒的な速さでゴールを駆け抜けると、45秒54の大会新記録をマークして優勝した。
「アメリカが持つ世界記録にわずか0.02秒に迫った。パリパラリンピックに向けてさらにチームワークを強化してパラリンピックの金メダルを目指したい」と、喜びを語った。

2位のイギリスのアンカーは今大会T34女子100mと800mの２冠を達成しているハナ・コックロフト。「ユニバーサルリレーは、本当に大好き。去年のパリ大会から出場しているけれども、実はとても怖かったの。ほとんどのチームはアンカーに男子の車いす選手を配置している。だからすごく速くて、後ろからすごい勢いで追いかけてくる。それが怖かった」と、笑顔で語っていた。「でも、チームを信じて、自分を信じて、個人種目とは異なるチャレンジを楽しんで、次の大会に備えたい」。

予選で日本新記録をマークし、決勝ではイギリスに0.1秒差で迫って３着となった日本は、第３走者の松本がコーナーでインレーンを踏んでしまうミスを犯し、失格となった。事前合宿でタッチワークなど練習を重ねてきただけに悔やまれる。「パリパラリンピックに向けて、課題を修正して再び王座を奪還したい」と、メンバー全員が意欲を語った。

GO KOBE 2024!

体感から理解、そして行動へ

大会スポンサーの一つで、神戸市に本社を置くアシックス（神戸市）は大会を盛り上げるさまざまな取り組みを行っている。会場では、メインスタンドの外にあるメダルプラザ前に設置した競技体験型ブース、「ASICS PARA-Booth（アシックスパラブース）」を出展している。

リアル感たっぷりの競技用車いす「レーサー」体験ができる「ON THE STAGE」など、順番待ちの行列が連日できるほど人気である。固定されたレーサーに乗り込み、実際のレースを再現した3DCG動画を見ながらレーサーをこぎ、世界のトップ選手たちと競い合えるのだ。周囲のスピーカーからはスタジアムの大歓声が響き、前方の装置からは向かい風も吹いてくるなど、選手たちの目線を体感することができる。

同ブースを担当するマーケティング統括部の吉井優さんによれば、連日、老若男女が体験し、「速い～」「楽しい」といった感想が聞こえるのはもちろん、「一度、レーサーに乗ってみたかったんだ」など、海外のパラアスリートも多数も訪れているという。「実際に体感することで、『選手たちのすごさ』を感じてほしいと思っています」

他に、選手への応援メッセージなどを書いたフリップボードとともに撮影し、写真をダウンロードできるデジタルフォトなども展開している。すでに多くの人々が選手たちへのエールを書き込んでいる。また、競技を終えた選手たちも大勢訪れ、記念写真を撮影するなど、にぎわっている。

■ひまわりの種のプレゼント

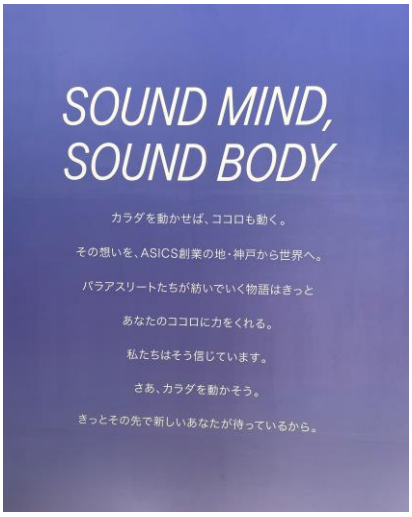
大会組織委員会は兵庫県内の多くの子どもたちに今大会を観戦してもらえるよう、企業に支援を募る「ONEクラス応援制度」を企画した。アシックスではこのプロジェクトに賛同し、試合観戦に訪れた兵庫県内の児童・生徒らにひまわりの種をプレゼントしている。その数は約30,000名分にのぼる。

「花がつなぐレガシー」として、種を蒔き、夏に花が咲いた頃に再び、大会を思い出してほしいとの願いがこめられている。ひまわりは今年、創業75周年を迎えるアシックスの創業者、鬼塚喜八郎氏が自ら絵に描くほど好きな花だったこともあり選ばれた。

■全員参画企画

アシックスグループ従業員を対象にした、「全員参画企画」も実施している。パラスポーツを通じた障がい当事者への共感力を高めることを目的として、何らかの形で一人ひとりが今大会に関わろうというプロジェクトだ。2,200人が大会期間中に会場に足を運び、観戦し、300人がボランティアとして大会を支えている。

パラアスリートたちの活躍を間近に見てふれることは貴重な体験であり、それぞれ体験した内容について、社内SNSに写真とともに感想や気づいたことなどを投稿することになっており、皆で共有ことができる。



大谷忍デジタルビジネス推進部／パラスポーツ企画部部長は、「参画した社員たちに共生社会への意識が高まってくれればと願っていますし、会社に対するエンゲージメントを高めたい思いもありました。ここまで、かなりの手応えを感じていますし、こうした取り組みを今後も継続していければと思っています」